

茨城県におけるファシズムの展開

一 ヒトラー・ユーゲントの茨城県来訪を事例に 一

石塚 響太
教科領域コース

1. はじめに

昭和10年代の日本社会は国家総力戦体制の構築期にあった。昭和12年(1937)の日中戦争勃発から、昭和15年(1940)の日独伊三国同盟締結へと至る過程で、日本は枢軸国側への傾斜を深め、その政治体制や国民の精神構造を、同盟国であるドイツの掲げるファシズムへと急速に適合させていったのである。対独接近が進む歴史的背景のもと、当時の日本において、単なる外交行事の枠を超えた社会的熱狂をもって受容されたのが日独青少年団交歓事業であった。この交歓事業はドイツと結ばれた日独防共協定をきっかけに、大日本連合青年団とヒトラー直属の青少年団であるヒトラー・ユーゲントが互いの国に訪問し、交流を深めるものであった。

本稿では、日本の青少年団とヒトラー・ユーゲント、ヒトラー・ユーゲント来訪時における茨城県の様子、青少年団の組織改革、交歓事業後の影響によるファシズム展開について検討する。

2. 日本の青少年団とヒトラー・ユーゲント

(1) 青少年団の組織体制

大日本青少年団とは、昭和16年(1941)1月16日に結成された日本における青少年団体である。この組織が設立されるまでの間に、日本各地で様々な青年団、少年団が存在していた。青少年団の起源は明治期まで遡る。当時は中学校進学者が「学生」、実業補習学校に通う者が「青年」と呼ばれた。大正15年(1929)には、青年訓練所が新設、昭和10年(1935)には実業補習学校と青年訓練所が統合され、青年学校が設立された。昭和16年1月16日には、戦時体制の移行に伴い、大日本青少年団が結成された。

茨城県土浦市、水戸市、阿見町、内原町における青少年団組織は、各地区の小学校に併設された商業、工業、農業補習学校を起点としていたと推察される。県内の青少年団は、市町村内の地区で村長が「会長」として任命されていた。

(2) 日独青少年団交歓事業の契機と国民の受容

日本の青少年団は、昭和11年(1936)11月25日の日独防共協定をきっかけに、ヒトラー直属の青少年団ヒトラー・ユーゲントとの交歓事業を計画した。

昭和13年(1938)5月3日にドイツ派遣青少年団が日本青年館に招集された際、文科省とヒトラー・ユーゲントとの協議により、日独両国で3ヶ月間に及ぶ軍事訓練及び団体生活訓練を共同に行うことを方針としていた。防共協定の締結もあった事で日独互いの国情や近隣諸国との関係について知見を深めることを重要視している。また、軍事面だけでなく、文化・思想の面でも緊密な関係を築くことを目的としていたといえる。日本青少年団は7月2日にドイツのケルンに入り、9月

25日までの3ヶ月間滞在した。しかし、日本青少年団は到着した後にヒトラー・ユーゲントの団員から服装に批判を受けたことがあった。当時の日本の青少年団は戦闘帽と団服に巻脚半にリュックサックを担ぐような最も活動的な服装であったが、在独邦人達からは日本代表青年団の名を汚すような貧弱で惨めなものとされたのである。日本青少年団はヒトラー・ユーゲントの制服を見て、丈夫な素材でありながら、団員全員が整然と揃っている様子に感銘を受けた。中道氏は、この出来事こそ日本がドイツから最初に得た「示唆」だとしている。

一方で、日本の青少年団がドイツを訪問している際に日独両国首脳で日本での交歓事業が計画され、約3ヶ月間に及ぶ国内旅行の詳細な日程と歓迎方法の立案に当たった。国内の各地域を旅行することが目的とされており、軍事的な交流だけでなく文化・思想という面でも交流を行うこととしていた。日本国内で行われる日独交歓事業に対する国民の機運は、出版物や新聞記事、そして国民歌謡においても表現された。

3. ヒトラーユーゲント来訪時における茨城県の様子

2回にわたり行われた大日本連合青年団とヒトラー・ユーゲントによる日独青少年団交歓事業における茨城県の様子はいかなるものであったのか。茨城県における第1回交歓事業は水戸市内において9月30日に行われた。午前は、道中で土浦市の青少年団に歓迎されながら内原駅に到着し、満蒙開拓青少年団訓練所を見学した。午後は、常磐神社や彰考館、武徳殿などの史跡を訪れた後、水戸駅で解散し帰京した。

この前日に、地元新聞『いはらき』ではヒトラー・ユーゲントを歓迎する際の注意事項を伝えている。注意点として国旗掲揚の仕方や歓声のかけ方の説明が詳細に報じられている。当時の日本の状況から、思想を共にしているドイツとの関係性を重視していたことがわかる。また、独訳した『弘道館記』をヒトラー・ユーゲントに贈る意向を示しており、日本の指導原理が日独外交の発展に貢献すると考えられていたようである。

第2回の交歓事業は、水戸市と土浦市において、昭和15年11月8日に行われた。午前は、茨城県連合青年団を始めとした八日本県団員が内原駅でヒトラー・ユーゲント代表団6名を出迎え、満蒙開拓青少年義勇軍訓練所を見学した。午後は、土浦駅へと移動し、霞ヶ浦航空隊に見学を行った後、土浦駅から帰京した。また交歓事業の翌日、ヒトラー・ユーゲント代表のユルゲルスは日本の国技を青少年の錬成に何よりも役に立つと絶賛していた。

2回にわたる茨城県での日独青少年団交歓事業で特筆すべき点は、国旗掲揚の注意事項の記事、ヒトラー・ユーゲントの具体的な順路と時間帯の周知である。県民にドイツとの外交を念頭に置くよう周知する意図があったのだろう。また日本側が、ヒトラー・ユーゲントから服装や組織体制など多くの示唆を得ていた一方で、弘道館記の独訳や国技が称賛されたこと、ドイツ側が茨城県から学びを得て、それを享受したことを県民に伝えることで、茨城県民の中にドイツとの繋がりを印象づけるよう促していたのではないかと考える。

4. 青少年団組織体制の改革

ヒトラー・ユーゲントによる統制された組織運営は、日本の青少年団組織に大きな示唆を与えるものであった。

第1回交歓事業時、大日本連合青年団が訪独した際、ドイツの青少年指導者でありヒトラー・ユーゲントの最高責任者であるバルトゥル・フォン・シーラッハを中心としたドイツ青年が、日本の青少年団は官僚や老人によって支配されていることを批判した。昭和14年（1939）4月1日には、シーラッハの指摘を踏まえて、大日本連合青年団が大日本青年団へと改組された。組織方針によると、日本の青年指導方針の一元的貫徹を行うことが規定されている。組織の管轄において青年団団長を文部大臣とし副団長の任命権も得ることとなった。また、青年団の一元的統制は、日本の青年団がヒトラー・ユーゲントから学ぶべき点を主張した動向の反映であった。

茨城県内でヒトラー・ユーゲントが訪れた各市町村では来訪後、青少年教育に変化がみられた。

土浦市では、昭和15年に文科省が学徒修練の強化を図ることを目的とした学校報国団の編成指示により、各中学校で報国団結成が行われた。また、昭和16年5月22日には中学校で新修会を改組し、学校教練や食糧増産作業、各種団体訓練を徹底して行った。水戸市では、交歓事業後に青年の問題が注目されるようになった。昭和17年（1942）には、市に一枚の独立校として上記の青年学校が統合し、「水戸市青年学校」として発足した。阿見町では教育現場を、高度国防国家の要請に応じた「錬成」の場へと劇的に純化させる触媒としての役割を果たしたといえる。阿見町の教育現場では、海軍体操や軍事教練が日常化し、軍艦マーチに合わせた画一的な行進や部隊の敬礼が盛んに行われた。女兒はモンペと上着、男児は巻脚半を着用して登校することが常態化した。内原町においても、昭和16年の国民学校令によって、尋常高等小学校から国民学校に改称されている。

5. 交歓事業後における茨城県の様子

2度にわたるヒトラー・ユーゲントの茨城県来訪は、単なる日独交流ではなく、枢軸国側の思想へと近づかせる転換点となった。

中村氏は、ファシズム国家では政府の政策から『正統』とするイデオロギーや生活様式にまで大衆を画一化する」とする。また、民族共同体至上主義に反するものを排除することと非寛容性がファシズム国家に生きる人々の共通意識だという。この大衆の画一化、民族共同体至上主義をファシズム展開とするならば、ヒトラーユーゲントの来訪による影響として、ファシズムの流れが茨城県内にも及んでいたといえる。昭和13年11月26日には、日独で結ばれた文化協定の全文とその詳細な目的が県民に提示された。協定事項は、極めて包括的かつ具体的なものであった。本協定の内容は軍事同盟のみならず、イデオロギーや生活様式、美意識といった内面的な領域においてもドイツに学び、一方で日本文化をドイツに伝えるものであった。

12月3日の『いはらき』では、第一次世界大戦におけるドイツの戦いぶりを賞賛した特集が掲載されている。ドイツの戦時経済や国民の耐久力を「戦果」として肯定的に紹介し、同盟国として手本とすべき対象としていたのである。

県立土浦女子高校の生徒は、ドイツの女学生と手紙のやり取りを行っており、大使館を経由して絵葉書や押し花、活動フィルムが同封され、授業時間割や学校の様子、街の様子なども交換していた。彼女たちの交流は、単なる異文化への好奇心というよりも、同盟国ドイツを自らと同じ民族共同体の延長線上に捉え、共に新秩序を建設するパートナーとして認識した上での連帯行動であったと考えられる。

茨城県下の女子青年に対しても、国民服の手本としてモンペの着用を呼びかけている。服装の機能性だけでなく、制服とする意向を示していることから、服装統一の重視や精神・思想の統一を外面的に表したものであったと考える。この「統一」という点は特に重視すべきであろう。

また、『いはらき』にはユダヤ人がパレスチナに国家を建設していることを危惧し、敵国であるアメリカの首脳陣の一部がユダヤ人であることを主張する記事もある。ドイツが掲げる反ユダヤ主義に同調するよう県民にも同調を促していたと推察される。

ヒトラー・ユーゲント来訪後の茨城県においては、単なる日独交流を超えた変化が生じていた。新聞記事に書かれた内容は、茨城県という一つの県が、政治・文化・教育・思想において、ファシズム体制に相当程度影響を受けているのではないかと推察される。

特に画一化という視点では、青少年団の組織改革を見ると交歓事業を経て文部大臣を団長とした組織統制や団員の若返りを方針としている。農工商を趣旨とした茨城県内の市町村にある各地区団体でも、軍事訓練を中心とした錬成の団体へと変化した点は注目すべきであろう。さらに県内女子青年団でモンペの着用を義務化し、制服として統一する動きなどヒトラー・ユーゲントが与えた影響は、組織体制という点だけでなく、組織の見せ方という点でもあった。茨城県が行った画一化の動きは、ファシズムへ傾倒していく姿ともいえるだろう。

6. おわりに

以上、日独青少年団交歓事業におけるヒトラー・ユーゲントの茨城県来訪を事例とし、茨城県においてファシズムが浸透した様子を検討してきた。

本稿を踏まえて、学校教育における歴史の授業を想定すると、新聞資料の活用が有効であると考えられる。取り上げた史料の多くは、地元新聞『いはらき』の記事である。当該新聞を教材として活用する意義は、茨城県と歴史的事象を結びつける点にある。ファシズムという思想を、生徒が住む地域の紙面に触れることで、身近な事象として捉えることができるだろう。

地元新聞という資料を用いた学習は、過去の様相を現代の課題に引き寄せて理解することへの一助となる。現代において、特定の価値観への同調や偏向に批判的な眼差しを持つための基盤となり、近代社会を深く捉えることができると考える。

主要参考文献

- ・中道寿一「ヒトラー・ユーゲントがやってきた-日独青少年団交歓事業の意味について-」（岐阜経済大学地域経済研究所、1986年）
- ・中村孝文「日本ファシズムの思想と戦後日本の政治文化 -社会契約説と市民の視点から考える」（武蔵野大学政治経済研究所、2023年）
- ・日本青年館『大日本青少年団史』（日本製版株式会社、1970年）
- ・土浦市史編さん委員会『土浦市史』（土浦市、1975年）
- ・水戸市史編さん近現代専門部会編『水戸市史 下巻二』（水戸市、1995年）
- ・阿見町編さん委員会『阿見町史』（阿見町、1984年）
- ・内原町編さん委員会『内原町史』（内原町、1996年）